

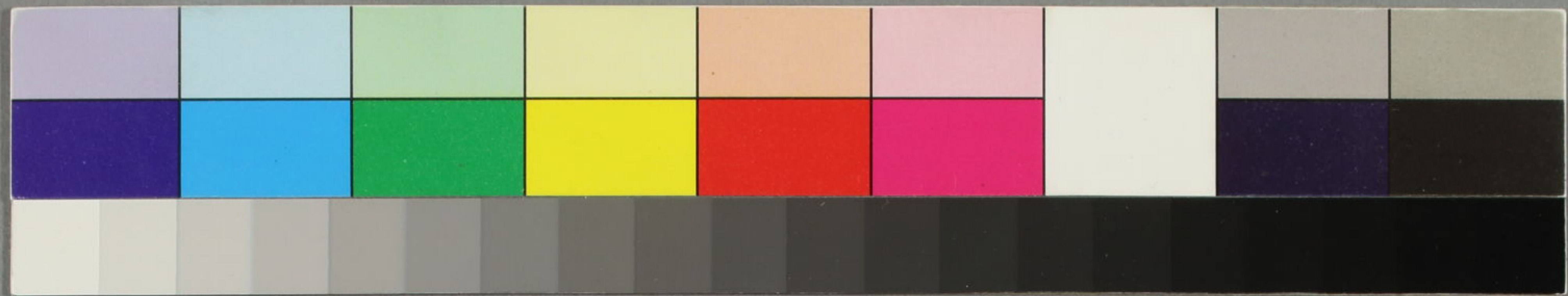
增補外題鑑全

和漢軍談  
諸家隨筆  
奇談怪談  
出像稗史  
小說雜錄

^ 13  
3797







門入13  
3797  
卷

# 外題鑑

文溪堂藏

文溪堂外題鑑序

慶元而降文雅盛旺釋史小說  
家著作浩翰繁富不堪重載  
書僧坊間各利其利刊布開雕  
且蓄月積豈啻萬億讀者茫乎  
不知津涯故寬文十一年平安  
書肆山田市郎兵衛編著書籍  
目錄三卷詳記刊行之書目是  
為近世刻書目之始矣自是而  
降遠則寺嶋宗意和版書籍考  
中村富平辨疑書目近則水邨  
孔恭羣書提要尾崎嘉羣書一  
覽等皆待之而後作焉書肆又  
繼其跡者延寶三年毛利大八  
刊書籍題林目錄大全三卷貞  
享三年無名氏改正廣益書籍





目錄三卷元祿初年西村市郎  
右衛門增補書籍目錄三卷全  
五年八尾市兵衛廣益書籍目  
錄大全五卷今坊間所謂五目  
錄者是也今七年江戶松村清  
兵衛新撰書籍目錄三卷全就  
無名氏改正目錄刪補前後換  
其名題重刊之者素不足以備  
一家寶永三年平安永田調兵  
衛增益書籍目錄六卷分別四  
庫以國字四十七音便其搜索  
所謂六目錄者是也正德五年  
江戶無名氏書籍目錄大全六  
卷全就永田增益目錄改其體  
製以為區別竊刊之者亦不足  
以備一家而間有補其遺正其

誤者不敢謂無所見矣享保十  
四年文軒柴橋新書籍目錄四  
卷所謂四目錄者是也又寶曆  
四年新增書籍目錄三卷所謂  
前三目錄者是也明和七年武  
村新兵衛大增書籍目錄三卷  
所謂後三目錄者是也文化中  
大坂書僧甚等採摭所謂五六  
三四等之目錄稍加點竄釘鉅  
為編題曰古今書籍目錄大全  
蕪雜蔓叢雖不足觀以其舉在  
于近盛行于世博雅之士或得  
寓目於此至他目錄歷世已遠  
版羅火災或少流傳知其名題  
者已鮮矣而況於搜索其書愛  
玩之者乎余嚮與冠山源公談



及此事公有意於博採慶元以降諸家之遺編而作為目錄使余與預其纂集之任業已起稿悉標具舉半出於余之贊成五換舊表以能成編為二十卷題曰近世藝文志其收輯之功可謂勤矣雖然公之意全在儒雅文藻不在雜說叢話其所記載僅止漢字者以國字記者概除去之識者皆惜其偏矣余故欲補其遺專以國字記者為主醇疵併收佳惡無存使觀者擇之三經螢雪以能為編為三十卷題曰津逮書目藏之篋笥時加整葺將以完備之然聞見狹隘不能及近世稗史小說出

像話本雜說叢話等其稿本惟甲午火無存予遺固雖不足以備大方君子之觀今而思之不能無憾余有再輯之志未果今得岡田生之書讀之自明知中六十年来自稗說叢話至雜劇院本上梨棗者不論短簡與長編標其書目詳其旨趣解題提要無所不備其疏釋之勞可謂勤矣生之意全在包羅巨細不在辨別佳惡故至於尋常著述未越羣流者流傳既舊不忍廢棄之姑準諸家著錄之例併存其目俾世之好羣籍者知其梗槩矣嗚呼書僧貪利儲欲之徒耳然用力於藝文如此好古之



士豈不嘉尚乎、生開肆於城東  
小傳馬街、舖曰文溪堂、其所雕  
刻、近人之著述、鑄版儲藏、以百  
而數、其人頗有膽氣、一龍一蛇  
與時俱化、故能其生計之盛、冠  
于書肆中云、

天保十年己亥相月良日

琴臺老人東條耕題



叙

茲以東都の書林二世を  
ぶんけんどうあるんりうく あんりや

文溪堂主人の書籍を  
ちやうらふ せのけん せらうら

周刻の製本を世に  
とんせん せのけん せらうら

十載事小休あり猶世あり  
とんせん せのけん せらうら

稀あり奇あり書を標り人  
とんせん せのけん せらうら

尔三葉あるの必じ書はし  
とんせん せのけん せらうら

或も持よりしとては別て  
とんせん せのけん せらうら

出像神史物の本紙譜南くに  
とんせん せのけん せらうら

出情ちまは所蔵の取本は  
とんせん せのけん せらうら

おとぎ三都の新著も漏れ  
とんせん せのけん せらうら



軍とり揚さげ多と敷しく領りめり  
依こり諸しよ國こくの旨しよ意い厚こうに信しんを  
寄よぎば年ねん采さい公こうと刊かんして其その  
業わざ跡あと同どう高こうの人ひとより有あるを乃なり  
書かけんんと紙しをうりが先せん代だい  
の志こころと継つぐ物ものの本ほん路ろの題だい鑑かん  
を備そへ最さい細さいに再さい販はんす  
且かつ古こくく其その表ひょう每まいの之この味あじ  
を異い記きに釋しやく史し好こうの記き憶おくを  
即すなはち故こに長ちやう編へん大だい部ぶの物もの  
の本ほんと十じゆ里りに懐くわい中ちゆうさせく

衆しゆ人じん成じやう樂らくすむ凡おま此ま小ちゆう冊さつ  
を貯たくわへ後ごを和わ漢かんの軍ぐん記き  
萬まん卷くわんの雜ざつ書しよ釋しやく史し常じやう子し序ぎ  
右みぎに有ある也なり僕ぼく文ぶん漢かん書しよ意い旨しよ  
氏うぢの丹たん心しんを武ぶ悦えつのあらり独どく  
筆ふでを補おぎなふ加くわえ校かう訂ていの  
全ぜん本ほんとせり十じゆ方ほう讀どく書しよの端たん  
天てん遠えん書しよ賈か文ぶん漢かん書しよが遠えん  
書しよと撰せん集しゆまる苦く心しん着ちやく意い  
の為ために忠ちゆう信しんを推おしして  
永えい久きう貴き賈か意いの意い願げんあらせ



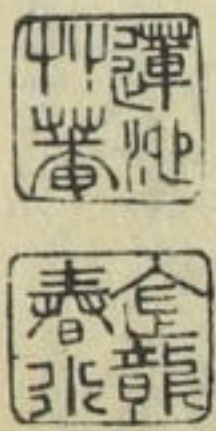
お中へとまのり

于時天保九年戊戌

仲秋吉辰

東都 蓮池菴

教訓老 鷓鴣貞高



猶此矣帝に漏るる返り  
幸年やまへ此後初著  
追て補刻す且後編より  
中形人情滑稽士を委く  
志してをき發行せし  
ゆらふ

撰者 文溪堂琴秀誌

○軍記の部

前太平記圖會 全六冊

人皇十六代醍醐帝延喜七年  
あり述衛院の治世を二百四余  
年の間武將六孫王経基をト  
ゆ源の姓賜はるる最初と  
源平両家の軍事奇談と云  
る記し之画を加へり

保元平治圖會 全十卷

七十七代後白河院の御宇  
福門院の御作行に崇徳新院  
の恨みより天下大乱と云  
の始末を記し之画も亦こ  
りとのなりそ平家の勢ひ盛  
とあり頼朝を伊豆の國に配  
流せざるん

源盛衰記圖會 全六冊



二條院應保年仲より安徳帝の  
壽水の頃まで凡そ二十余年  
の間の史を記す

義経勲功圖會 前五冊  
後五冊

牛若丸とせし時よりをふめと  
考てくは山不登り 剣術とま  
あむ後以鬼一法眼の軍法伝  
うけて一代の功名かまきほ  
まことなごりく画解とせ  
老名のかり

義仲勲功圖會 前十卷  
後十卷

水曾義仲ハ平家と討つ源  
家の愁眉とむらう大功実ハ  
頼朝義経の功ふまされり  
いふ頼朝の奸心不より其  
盛衰短くいさごとく旭將軍の  
威名高き一代の功とせむ

繪入 鎌倉太平記 前後十二卷

とる北条家執権職九代の間  
の治乱舟廢然恭時の仁政高時  
の暴悪とせり記せり

星月夜頭晦録 當時焼板

頼朝公三代の間の君臣の得失  
かほらの事跡とせむ

繪本 和田軍記 前後十二冊

和田の義盛、鎌倉與立の功臣  
その一族九十三騎忠烈なる人  
老か口惜く北條の悪とせり  
英名とせむはれは武勇の  
老とせむはれは画解とせむ

繪本 曾我物語 全十冊  
祐成時宗が敵討とせむ



録倉新語 五初冊編

星月夜と同日の夜より多り

繪本平泉實記 前十二巻後

頼朝奥州征伐の事とて云くもる

太平記圖會 初編八巻

人皇九十五代後醍醐天皇乃即位より九十九代後光厳院の治世まで凡四十年の間忠臣孝子の傳を由かえらまはし軍記ゆへ本朝無双の名記あり

繪本楠公記 三編楠三十巻

日本武略の第一智仁勇の名將楠正成の忠烈奇軍太平

記ゆりまらるるものと云く記しといとれりろ

楠正行戦功圖會 前十一巻後

正成の男正行父の遺訓を守りて南朝小忠と盡し軍畧奇兵とありて足利勢とやぶる戦功美談いと多き故あたくし集録して圖繪を加えり

楠二代軍物語 全五冊

あまのくさる繪解めと案あり價も下直るま進物なりと云いしこと

繪本應仁記 初三三巻十五冊出来

足利將軍義政公政事のたごろへより應仁の大乱義昭將軍信長小天下と奪はるる



まで百余年の争戦とあり  
江戸 高井蘭山輯  
漢齋英泉圖

如見 清正真傳記 全六冊  
感徳 清正公の幼立より一代の  
名將の清正公の幼立より一代の  
武功と圖繪とを

繪本甲越軍記 三編前  
三十六卷  
甲越兩國の智勇と競ふ古  
今無双の軍書あり

繪本菊地軍記 前 後  
十冊  
九州の名家菊地家の武功  
を記すあり

大々羅軍記 全六冊  
内 多羅軍記  
周防山口の大内家の軍記あり

但し作て物語あり

太田道灌雄飛録 全六冊  
一代の武功あり 繪入  
物あり

繪本 里見軍記 全十卷  
南総

大の書 里見氏の起原上野の  
國あり 里見村の由来あり  
絶代々の武功あり 繪入  
三國の猛將の筆蹟あり 五  
十餘箇城の太守と仰かれ 東  
小美名高 仁と施 義と  
凡八州の名將 古跡 里見家にゆ  
かきあり 繪入  
中興の元祖 義實の徳行あり  
さるる 後 平島の基の城の合戦  
北条氏と争ひ 虚実 且 田原の



たあふ世族らと一武藏の諸士と  
あはれをかたむかす義戦多と太田  
道灌の子孫太田源吾同源六の  
勇力里見氏と合体して小田原  
勢を打破る功戦数代連綿とつ  
たる事實とを語り記すの多し  
東陽齋主人輯録

復仇 忠誠實録の部

繪本忠臣藏 前後 二十冊

四十七人の義士の傳と諸書より  
多しそ今よりあせ物語あり

繪本雪鏡譚 全十二卷

加賀見山の實録北國諸士の  
美悪とあやふ記を

繪本金花譚 全十二冊

頼兼ね一廓通ひ文治高屋のり  
をたぬめと一政岡の忠義又悪人  
仁木彈正の奸智本とあつて  
て武門の用心とあるさめあり

繪本靈驗記 全十冊

毛谷村六助仇討りあがり



繪本伊賀越 全七冊

渡邊教馬唐木政奎門の助太刀  
五ノ沢井又五郎ととも大勢の  
仇討めがらり

忠孝美善録 十前後冊

伊賀越の後日ともいふ仇討之

繪本英雄記 全十冊

繪本荒川仁勇傳 全十冊

同復仇孝勇譚 全八冊

同誠忠傳 全十冊

同則定仁勇傳 全八冊

同白石新 全六冊

繪本神靈記 全十冊

田宮坊太郎が金比羅の目撃  
大敵と討らめがらり

繪本靈驗記 全十冊

世にいひ傳へる乙川の血なま  
めがらり

繪本靈驗記 全六冊

繪本龜山話 全十冊

世に石井明道士とも名はく  
繪本合邦辻 全十冊

加州高橋氏の復仇美談多り

茶店墨江草紙 全九冊

殿下茶屋の繪本あり



同會替松の雪 全七冊

西國幼婦孝義錄 全十冊  
順礼

繪本雙忠錄 全十冊

豪傑勲功錄 全十冊

繪本顯勇錄 全十冊

同大閤記 百景丹

信長記 二世海防 亦三冊

新編 稗史之部

飛田匠物語 全六冊

世の人口に傳りたる左甚五郎の  
故由は思ひよせて番匠の奇巧人  
の命を救ひし唐國の人と智巧  
くくで勝てる業と感ぜぬ其  
外大王の故実のつるまをく  
記し或はむさしの國竹芝の故事  
更科日記の文雅のあやむ奇  
談とすて珍しきものも  
綴らまじりこのよと本の佳文  
とあらふかきともあふ

東嫩錦 全五冊

小枝繁著  
こま東の仇討の多々実録小  
りつて作らまじりものよと



古今風土人情  
情とまやふせり

双蝶々白糸草紙  
全五冊  
首藥亭作

敵討松山話  
全六冊  
立川馬馬作

近江縣物語  
全六冊  
六樹園著

繪本妹背山  
全六冊  
振鷺亭作

田村物語  
全六冊  
川上老人作

千代能物かごま  
全五冊  
振鷺亭作

俊徳丸  
全五冊  
同作

月宵鄙物語  
前後十冊  
真顔大人作

梳久松山物語  
全五冊  
馬琴作

勢田橋龍女本地  
全三冊  
種彦作

忠孝連理片袖  
全五冊  
一九作

長柄長者鶯塚  
全六冊  
鬼卯作

松王物語  
全六冊  
小枝繁作

雀馬樂奇談  
全六冊  
同作

天橋立  
全五冊  
一九作

金花夕映  
全五冊  
谷我作

自来也物語  
前後十一卷  
鬼武作

漂注との雪  
全五冊  
馬琴作



石言遺郷 曲亭主人作 全六冊

遠江の國佐夜の中山みわりと  
りある夜泣石のこと成種と  
して菊川の里の奇談あんど  
哀まありろき物ぐらあり

柳の糸 全五冊  
小枝繁作

新累解脱物語 全五冊  
馬琴作

新波七長臣 全六冊  
谷我作

窓螢餘談 全六冊  
琴魚作

小櫻姫 前編五卷  
京傳作

小櫻姫 後編五卷  
琴魚作

前後もよく揃ふてれりろー

國字鶴物語 全五卷  
首藥亭長根作  
葛飾北齋画

頼政鶴と退治と弓箭のすれ  
高くわを鶴によつて種々の奇  
談を新に説きつる因果物ぐら  
ま手か不狂歌の大人を戯作者の  
及ぶ文章一家の雅風あつた  
不視ゆる草紙あり惜ゆる取木  
焼失の後摺巻と音とまれり

菖蒲草摺五月雨 全三冊  
文東陳人著編

六波羅落と發端と一之作る物  
ぐら此取木も今ハあー

千代物語 前後  
十冊

百合若禁居鷹鳥 全五冊

世小謠百合若十日取の物ぐら



松風村雨物語 前後十卷

文陳人作 歌川國直画 漢齋英泉画

行平朝臣因幡の任より須磨乃浦のいづり多々の事跡古今にありありと奇談あり

嫩髻蛇物語 全五冊 全亭主人作 漢齋英泉画

金鈴橘草紙 全五冊 同作同画

風狸傳 全五冊 柳亭種彦校

忠孝顯名録 全六冊

放下僧物語 全四冊

車僧物語 全五冊

雙名傳 全五冊

花若丸一代記 全四冊

泉近衛物語 全五卷 福地鬼外著

一名大鳴軍記ともいふその趣向一際別みたり

繪本沈香亭 全十卷

新田義助沈香亭に在る奇談

巻の首に奇術をたぐるもの異説後より南朝合戦のありはたと記し之常のよと本とたりて

忠孝比玉傳 全六卷

古實今物語 全五冊

坂東忠義傳 全九冊



浮牡丹全傳 全四卷  
山東京傳著 歌川豊國画

浮牡丹香爐の由来山路須渡の  
危談名匠の京傳先生妙作画  
もまゝ元祖豊國の筆小に本  
流行をよめ製本その頃評判の  
草紙多うが板木焼失と今ハ  
絶る

巫山夢 全五冊  
十返舎一九作

八文字屋風のあなをさへ一流  
の口調を本まゝの例の滑稽を  
兼たり

初夢富士見曾我 全三冊  
元祖 馬馬作

歌舞伎年代記 全  
元祖馬馬撰集

松井物語 全三冊  
赤城山人作

日本水滸傳 全五卷  
綾足大人著

八百屋 胡蝶夢 全五卷  
於七

明月清談 全五卷

復讐言故郷錦 全五卷

鉢被姫物語 全五卷

出雲物語 全五卷

東雄操物語 全五卷

東雄過糸筋 全五卷

三鳥 麓の花 全五卷  
小女郎

復仇武藏鑑 全五卷



五人振袖 全六卷

白鳥奇縁 全六卷

河内七嶋 全五卷

薄雲奇譚 全五卷

幸物語 全六卷

白玉草紙 全六卷

新編熊坂物語 全五卷

謡曲春栄物語 全五卷

蟹猿奇談 全五卷

筒井清水 全六卷

在原草紙 全五卷

櫻木草紙 全五卷

鬼嬢傳 全五卷

千貫樋 全六冊

小説江登紫 同

金鱗化粧櫻 同

虫狩宇治紀聞 同

繪本笑鳥林 同

會替三浦譽 同

奇木草紙 十前後卷



響通箭 全七冊

於陸夢の浮橋 八前冊

幸助 妹背語 全五卷

繪本打出濱 同

繪本綴の錦 同

解若逆櫓松 全六冊

霧書替文章 全五冊

那智の白糸 同

奇談青葉笛 全六冊

繪本伊吹物語 全五冊

繪本遠山日記 同

雲井物語 全五卷

手引の糸 全六卷

弥生櫻 同

雙三味線 全五冊

繪本檀二葉 全六冊

金傳 駿河舞 同

繪本實草紙 同

金谷金五郎 全五冊

王洒搓櫛 同

小意盤



蝶の夢花之曙 全六冊

朝顔日記 前五冊 後五冊

駒沢治郎左門の傳 異朝の小説 翻案 繪入 全八卷  
柳浪大人の補綴 評判

室の八嶋 全八卷

浪花俠夫傳 全六冊

男伊達の志 ありて新奇珍説いと多し

盆石皿山の記 全五卷

越路章 紅血丸の事 前十卷 後二卷

嵐山花月奇談 十冊 後冊

復讐言安達原 全六冊

峯乃ふが牙 全六卷

北野 二葉梅 全六冊

孝子嫩物語 全五卷

石堂九川萱物語 全五冊

蜻蛉の巻 全六卷

若葉榮 全六冊



愛護の若 あご 全五卷

鳴川大神物語 なるがわい 同

繪本口之碑 えほんくちのいし 全四卷

我儘草紙 わがままくさし 全五冊

玉照物語 たましょうものがたり 同

壘談堤の菴 るいだん 同

阿波の鳴戸 あわのなるど 同

和漢の染分 わかん 同

繪本浪花男 えほんなげな 同

繪本根笹雪 えほんねさしゆき 全六冊

檀風物語 だんぷうものがたり 全五卷

復仇尼城錦 ふくしゅうにじょうにしき 同

西海浪間月 さいかいなみづき 同

鳥邊山老の糸 とりべのやまらふのいと 同

竹乃伏見 たけのふし 全六冊

三山草紙 さんざんくさし 全五卷

復讐言十丈松 ふくしゅうごんじゆまつ 同

大和物語 やまとものがたり 同

忠臣山賤傳 ちゆうしんざんせんでん 全六冊

琴松譚 きんまつだん 同



文化宗像曆 全七冊

新板 淨瑠璃姬物語 同

芦茅草紙 全八冊

庚申談 全五冊

觀音守護宝劔 同

鏡山烈女功 同

旭立帶 同

復讐親子塚 全六冊

松蔭草紙 全五卷

以呂波草紙 同

繪本松栄花 全六卷

同 夜船譚 同

同 炭の露 同

再開高臺梅 同

二枚繪草紙 同

波屋形金鶏新話 十前卷後

女熊阪臈枝草紙 全五冊

雨夜傘 全十卷

都鄙物語 全五冊

繪本賢女鑑 同



夕是鏡

發功譚 全六冊

名月夜話 同

春夏四季物語 十前後

竹密犬猫奇談 全五卷

復仇二見浦 全十冊

同 越女傳 全十卷

本朝惡狐傳 全十冊

梅川赤繩奇縁 全六冊

忠英衛 女水滸傳 同

二個誓笛摺 全五冊

小野八十島漢 全十冊

繪本物草太郎 同

同 奇縁傳 同

同 石金譚 同

全傳籠目草 全六卷

道成寺鐘記 同

長門月桂新話 十前後

世継草紙 十前後

四谷怪談 全五冊

梅菊新話 全六冊

下頁蓋



野路の玉川 全九冊

志の酒乃から深 全五冊

双蝶記 全十卷  
山東京傳著

その草紙の山東公卿の作  
かきめたる古今天類の妙なる  
画の元祖豊國の筆にて彫刻の  
る酒乃の製本ありふのほし

白狐傳 全十冊  
玉山馬作  
一名あやう物語

近頃まゝなる名画作を東  
あまの絵もあやう草紙あり

山拵大夫 全五卷

後今調録 全六卷  
谷峯作

月水奇縁 全五冊  
馬琴作

三七 南柯夢 全六卷  
曲亭馬琴作  
葛飾北齋画

筒井順照楠と切て下りて  
木精の怪より半七三勝の奇縁と  
説古今人情の意を深く哀  
さめたりる物語なり

南柯後記 全八卷  
南柯の夢の継作あり前編あり  
もまゝなる奇談といふべし

繪本野草紙 全五冊  
李丁庵三馬著

常夏草紙 全六冊  
馬琴作

お夏清十郎のののの  
文学上人 橋供養 全五冊  
行狀記 小枝繁作  
あまの盛遠の記あり



松添 秋七種 全六冊  
馬琴作  
か深久松の物語あり

刀筆青松石文 全八冊  
馬琴作  
摸凌案のおひききも亦一種  
の奇談あり

浅間嶽面影草紙 全三冊  
柳亭種彦作  
後編 執筆譚 全五冊  
種彦先生の新業音代あり

阿古義物語 全五卷  
三馬著

同 後編 全六卷  
春水著

弁慶異傳 全五卷  
英泉再  
為永春水門人 柳魚作

梅花水烈 全四冊  
山東京傳作  
後編 梅花春水 為永春水作 全四冊

前編 發市の後 數十年後編と  
て全傳とある 実小水烈春水の如く  
鮮和けり 小梅が愁の眉と  
看官これ 由六衛の物語とあり

隅田川梅柳新書 全六冊  
馬琴作

梅若松若の事跡と種と  
名にわ作者の新書と岸の柳の  
梅が香とて之を筆の綾錦文章  
清き隅田川の景色も凡ゆる物語

歌討裏見葛葉 全五冊  
曲亭主人作

三國一夜物語 全五冊  
曲亭主人作

富士と浅間の煙のあけ一夜乃  
中板木の焼失今此世に絶り



近世 霜夜星 柳亭主人作 全五冊

怪談 世の人々の言傳ふ四谷怪談の會  
入母芝居ふるも此本の著述  
ありぞわこじあり

勸善常世物語 曲亭主人作 全五冊

最明寺殿雪の段の音ろ流る

安 積沼 山東京傳作 全五冊

小幡小平次の怪談あり

雲絶間雨夜月 曲亭馬琴作 全六冊

鳴神法師の物語りつとも孝子の  
傳をかえてあり

安方 忠義傳 山東京傳著 全六卷

將門の貞女 渡邊武雄 貞女の術は依  
て勇士を招き父のころごとく継人  
とすの事あり

うざんげ物語 山東京傳作 全六冊

稚枝鳩 曲亭馬琴作 全五冊

右のまもぢう八年すし 兩書より不  
相同 志望ごもさかふ名人の  
作るまもぢうふむさき 獨兵  
ありぞあり

鷺之談 山東京傳作 全五冊

四天王 曲亭主人作 前後十卷

糸櫻春蝶奇縁 馬琴作 全八冊

旬殿實々記 曲亭主人作 前後十卷

輝九 半月夜話 前後十卷

傳記 白頭子柳魚作 前後相合し七看に倦るあり



松浦佐用姫石魂録 前後全本 十二冊

曲亭主人作

瀬川采女才女於菊が傳譯翻案 巻ありるさ志ゆる多し

美濃八丈奇談 全七冊 馬琴作

古衣 奇談 談るり

さくら 全五冊 山東傳作

奇談 一部の刻向古今あり 山東傳作 世に繪入るる本流行 遠近物語と第一巻あり

忠臣水滸傳 十巻 山東蒼著

忠臣蔵と水滸傳のむかし 著りありるものあり

假名手本後目文章 全五巻 元祖 北斎老人再

忠臣蔵の後日あり古今の妙作殊 小一流の筆意あり

忠孝潮來武志 全五冊 同 同 画作

孝子の物語馬馬老人一代の作と云

鉄手摺昔人偶 全五巻 柳亭種彦作 柳川重信画

新刻向山東新曲 珍書なり



紅血文四ののり  
全六冊  
馬琴作

頼家阿闍梨伝  
前巻  
著者堂馬琴作  
其師北齋翁画

三井寺の所圖頼家阿闍梨  
奇談あり木曾義仲都登りの因縁  
清水の冠者義高白鳥の術と行末の  
奇談袖間新太郎の復讐言の辛苦  
烈女唐糸の忠臣あんど古今に秀  
一ののりあり

夢想兵衛胡蝶物語  
前後十巻

夢の後の作者の博識わさ  
小見ひく世の噂理屈にかま  
かひなきの腰をわたりて自  
然とわらわす妙文百六千度  
そりかへてあはれぬわらわ  
は三井寺の所圖頼家阿闍梨

青砥藤網摸倣案  
初編五巻  
曲亭主人作

同  
二編全五冊

音破左門最明寺の眼代りて評  
定衆の二位とあり仁政と施し打を  
正し明德慈善とすむ物語あり

稲妻表紙  
全六巻  
山東京傳作

稲妻のほじまりえり不破の関その  
句を以て思ひする不破と名古屋の  
物がたり美中新奇妙事取合せ  
あき卦向きてか実にやぶらまの  
きりくち草紙いこ

本朝粹菩提  
前後十巻

あの書稲妻の後編中名古屋  
小山三の復讐に休大禪師の傳奇  
板よりかきと天下老和尚の活法佛



智力の道化諸書より撰り  
ひづる一 山東庵主人作

濡燕拙傘雨談 前 後 十 卷  
曲亭主人校合  
墨川亭雪齋作  
柳川重信画

傘は移りてをり濡燕といふ句に  
すりて外題をつけらるるありは  
彼京傳子の箱妻とあてて見れば  
女中衆の名古を以てのぬき燕は  
らゆめてあはれと申し此の縁の愛  
殺し山東の山より墨川の川に新ら  
るく洗濯せしとほるる

曠精奇談 全五冊

坂東 濡衣草紙 全五冊  
奇用 苜蓿亭著

あはれと申すの珍説はさかひの  
焼失してすの巻世にさるる

昔語質屋庫 曲亭馬琴作  
勝川春亭画 全本五卷

繪入物語の例の戯作のたむわび  
事跡と吉野の皇居のたむ吉野の  
麓六田の里小室屋室珠といふの在  
し由は發語とは其家元兼好古の  
癖あり好事のものを質ふりて金  
貨を活業と有り或夜主の主藏の中  
の物音をたつてはしるる是とあ  
ると思ひよのひ足して登るる春和  
ひのたの段階子さう彼三階の巻  
トと息もらして伺の者も種々  
の道具質の齎るる精気わふ  
と各々その上れとてかゝる其中  
あはれ博學めたる先生ありこれ  
多し延喜の年号とあはれ言見臺  
の精魂ありこそは成判者みよ  
らるるその夜まといのあはれの月  
のふらと評注する役とほるる



曲亭翁の滑稽を以て其の著  
多々のむくむく異物を記す  
いと数々の品を以て其の古物に  
国と経めぐる果に那須に終り  
との玉澤前の孤の皮衣を以て漢  
末の軍師を孔明の陣太鼓紀の名  
流が錦のふくや袈裟に前まを大  
破の虎の法の品を源家の重宝を  
丸石堂元高野登壇の脚半を其  
石小のく説き古未発の道  
理を以て古書のあままり俚俗  
のまじひに明らうくせしむる  
くも一度の巻を以て其の  
理にようく万度を發明するの教  
えをうくるがごとく物を本を  
らのもそもむとも用捨のさるる  
まろくせあらくく書と信じて  
よまぬ曲亭翁の著りし書は  
師となすもあはれくく文字の  
ともかたへとりぬ

俊寛嶋物語

曲亭馬琴作  
歌川豊廣画

前編 五冊  
後編 五冊

平家世をうくる二十年皇統を  
茂み下を苦め非道の行を  
多うけし平家武家との小毛  
と憎むあま平族のさあことわ  
れつと心ぬ者もるに中に新大  
納言成親々の思ひに祖平家  
と傾けんと人をもてかろく  
その大將の列下は法勝ちの修  
行俊寛が度量武家の人あま  
さり如意が嶽の山中鹿が谷の山莊  
ふ一味のさかろく會合せ此を死  
牛若丸平家の容体とうろくんと  
都小登り如意が嶽の山中に  
折しも平の清盛が如意山の滝を  
るさんそ多々の同勢に引つれ御  
所事押の折しも牛若丸山の  
上より直見下りむる目覚しき



平氏の行状を清盛入道の老の歩  
 行の院の御幸に終るまでありといふ  
 と榮へて居る所(義朝の御將門  
 太郎正親といふの牛若の畧量と元  
 めて力を合へ大磐石と山の上より  
 投下して清盛の車ども潰れさせ  
 して清盛の車にわづりて  
 必死を退き正親の打死しうあら  
 ばとも牛若の大敵と切やがり俊寛の  
 下部が途中に下と置る長持の中  
 ふかきまてとくぞも鹿が谷の別荘  
 へかまあはれとめて俊寛は對面の  
 奇談との文章のこすやうふあり  
 して古今の作者のまふ及ぶの  
 多し是も牛若の時勢と論し俊寛  
 とのいふ平家とていふとまてを  
 とらむ先見明智その年才に感下と  
 俊寛夫婦牛若娘の舞はるさんと  
 するまの人情のありはるる  
 かに牛若の奥州へ下向俊寛の訴

人の者わつふらふ事やれ草子鬼  
 東の嶋が流さる其子の辛苦艱難  
 壽考の孝松の首の貞実する俊寛の童  
 るり安王有王をたを義あはれむべ  
 かにまてのめがりのいと多しまそま  
 俊寛が嶋の段の誠小奇代の舞向ゆ  
 着宜のさるも曲亭公羽の機園と案  
 するともわつふ後小牛若が再度の都  
 のかり白川の堪海と戦ひ鬼一法眼に  
 知合みある姫との恋情清の巻の秘  
 書とあはれ鬼一との回答けりも源家  
 の柳曹子九郎義経ともいふとま聴  
 明英智のその風情あるく小作り物  
 なるともやいふとまを馬琴草  
 の著しう繪本にむらるる多けれ  
 別てこれら嶋めがら分以て美談  
 といふらるるこれと第一の佳作とい  
 らるるや八天侍の長編をのけて  
 俊寛嶋物語といふ繪本を中  
 最第一番の著編といふべし



莊蝶翁再遊外記 全五卷

曲亭馬琴大人作

此書は前小流行の夢想兵衛胡蝶物語の続編として古今未だの妙論奇説前板のありあけ小まなねと百増倍の夢想兵衛の年功のりていふまゝ世に珍しき新郷者ひらきその風俗を教訓する博識弁明の普く世間の人情小通し和漢古今の学者といふものも説き及ぶ詮に滑稽筆笑談自然と伝わり古来とていへば今様の西遊小日る俊才文雅と不再びあふる莊蝶翁と曲亭翁の年々積る著作の精妙とて賞する競べのめい皆あふくは小むまよりいへる丹誠の作といふものも右の如くいへばふし深理醒俗の一大奇書なるべし

芳艷 好文士傳

初輯 五冊

為永春水作 溪齋英泉画

- 第二輯 全五卷
- 第三輯 全五卷
- 第四輯 全五卷
- 第五輯 全五卷

後花園帝の承亨の頃南朝の古事に起原梅亭の好文が吉野殿の前論梅上法師詠国でめぐる梅姓の五賢勇士の奇功とあり後道准三吉くさまで招く河肥の城を奪るの奇談關東の古跡をめぐりかね又管神の灵比その神徳利益とあり多く古戦場を遺傳とありて松持資君の文武の徳次天が下にかまるとあり勇の古今美談とあり



中本 三卷

由亭馬琴作

此の類本は珍らしく中世美  
麗の不仕立二帳を三巻と  
画も当時の流りてまじらうに  
うりさればとて近頃とてな  
俚俗の痴情をまじりて  
史のまじりてき拙き草席の  
おもしろき事記さし流りて  
る中形の絵入るまじらうに  
ての着る大に推しあはれ文  
法自在の曲亭の素作の  
うらまひのまじりての香が  
まじりてのまじりてのまじり  
まじりてのまじりてのまじり  
わらわの唐の小説をまじり  
人目するまじりての珍書をまじりて美  
婦人の教をまじりての雅  
びの文章をまじりてのまじり  
まじりてのまじりてのまじり  
まじりてのまじりてのまじり

長編大巻之部

小栗外傳 三編揃 全十八巻

小枝繁系大人著  
葛飾北齋画

説経祭文にまじりての  
栗の判官照天の雅の故事は  
新に作る物語なり

更科草紙 三編揃 全十五巻  
栗枝亭鬼卯作

勇婦更科雅のこととて山中麩  
胡の傳尼子家の貞五十勇士の  
奇談とありては

景清外傳 三編揃 全十五冊

小枝繁系作  
歌川國直画

悪七兵衛が少年うりの事とて  
くはてし奇談なり



朝夷巡嶋記 馬琴作 豊廣画

初編 五卷

二編 同

三編 同

四編 同

五編 同

六編 同

七編 近刻

木曾殿豊津の敗軍より巴御前の忠操  
貞烈さもありけんと思ひし曲草大の  
筆刀自在和苗の義盛の館に巴が自  
害のさほさ史に義仲の胤と出書  
ある婦人かぞえありけるんと  
自然にふる愁歎遺感さすま  
巴の尺をよせに傳ふ人口ゆ叶  
ひて其意を尽さざるものなる  
の妙作とあふ譽ふ鳴呼るべし  
必らばよませぬこと

鎮西八郎 弓張月 馬琴作  
為朝外傳 北齋画

前編 六卷

後編 同

續編 同

拾遺 同

残編 同

全本三十卷

六条判官為義の八男将者為續  
の堪えとせ九筋下り菊地原田  
の令と威伏を鎮西八郎と稱する  
を道くある保元の乱に都登て  
新院の御味方にして軍器を用  
らるる無念の敗軍に猶大敵とく  
が後八丈鳥に日る琉球國へ度  
海するの珍説すて故事と旧  
記より為朝一代の行状のさすも  
のすするは亦その室をぬい堆乃  
貞烈とて尽しがた美談多く  
凡そこの本の隨一あり



六六 水滸太平記 岳亭作 英泉画

初編 五卷

二編 同

三編 同

太平記の中と水滸傳小を  
あきまき種と区三十六の勇ま  
まき水滸傳のむきみ太平記に  
うたへ丹誠の作といふ

俊傑神相水滸傳 十五冊出来  
右同作

あきまき盗賊の名をかき水滸傳の  
風をうたへるき作あり

新田功臣録 前後 十卷  
小枝繁老人作 葛飾北齋画圖

新田功臣録拾遺 全五冊

小枝繁老人稿 狂訓亭春水著

此書新田義興公の公達徳壽丸  
の生より南朝の天子に忠義の心  
ふかき南帝一統の徳にふかきと  
に味方をかりの信義亦これを補  
佐する功臣を誠忠或貞安  
節婦の百切千磨軍師契中の才智  
敵を敗るの計許且左中将義貞朝  
臣の老臣篠塚伊賀の入道石原が  
再身強勇と頭し義法を佐する  
美談万里小路勝房朝臣隱遁の  
後神仙となり紫花真人とよま  
る人の神通義統の火難殊然  
小察もてその一黨を一旦仙境へ  
かへさせ再度世にあへり  
足利勢と切るむけ南帝と決心  
あきまきつる奇軍南朝追慕  
の物なるあり



外題鑑

相馬 總猿潜語 英泉画  
將門 狂訓亭校合

初編五卷 二編五卷  
三編五卷

○初編より後、狂訓亭の門人  
あり、駒柳魚が継作あり  
將門の幼年を思ひ起し、其母  
北斗に祈り命を捨て將門を世に  
出さんとす。前編は其母と  
勇士の傳、まゝ發端の赴向  
奇代にあり云々

木曾 義仲 鼎臣録 溪齋英泉画  
頼川如臯著 永兩校合

小松の内府重盛の仁政、櫻田中納言の  
一條あり、まゝらひ終の故事、帶刀先  
生義賢大倉の最期、悪源太義平  
の赤菅、伯父討の意味、深長まゝ

駒王丸の出生、實盛のそとこれと  
ゆきまゝなるの義心、其後木曾  
の地に成長し、今井兼右衛門根井巴女  
とて、その忠烈、勇士の幼立、伊勢桑宮  
の乙女に分姿、幼年より平家の動靜  
を伺ひ、旅中の患、苦次弟に英勇豪  
傑とあつめ、竟に北國に旗を上げ、身を  
後を謀り、小事を大謀とす、其の  
奇談と多く、爰にその大畧とを  
尽しが

初編 五卷  
二編 同  
三編 同  
四編 同  
五編 近刻

伊勢新九郎大志傳 全十五冊 近刻  
源朝宗雲が京都を浪人し、諸  
國武者修行の奇談あり 為永作

外題鑑 〇三十一



關卷 俠客傳 馬琴作 英泉画

初集 五卷

二集 五卷

三集 五卷

四集 五卷

此書南朝の忠臣新田捕の一決り  
今洛の後橋志城とびまて兵利の  
非義と恨み南帝補佐のえかごと  
ゆじ其難辛苦するの物語ま捕  
氏の二奇女姑摩姫幼羊に古今に  
はゆ稀る才智勇烈男子はま  
河業九六雄の仙術する巻中の奇談  
未だ新刻向多ありて実に厚巻  
て驚奇といふ外題みわりのり  
作者の自讃よりわがうびあそ  
古より史すむ人の遺憾とする  
南朝忠臣の外傳ままといふ快記  
傳記ありし

近世説美少年録 馬琴編

初編 五冊

二編 同

三編 同

四編 同

此書の調防の大内家豊を焼く  
あそで發端して大江に成る萬実  
信勇陶瀬十郎のお夏にまらりて  
其蛇念せに隠頭してわが少年を  
まするすそ物語の風をそ八犬  
俠客のおむきといふ大に異なり善  
惡成つる結美少年の所為とそま  
り小書にや貧福因果のな理を  
えて悦ぶさわり想をいづく涙を  
佳しき快然なる栄花を視せむ  
ひ艶容美麗の婦人といづく且  
娘に且自らいふも春情の動する  
おき場ま正然とて看直行を成  
りての段も備り誠に古今の奇談也



大内 十杉傳 為永春水著

初集 五卷

二集 同

三集 同

四集 同

五集 同

第六集

上帙 四卷  
下帙 四卷

大内 防州山口の大守大内家の家  
 系と云ふは且大杉と代せざる徳行  
 より杉といふ字を冠する名氏の勇  
 士十人方に出身して文に富あり武に長  
 ずるなり身もあつて山を朝する剛勇  
 の士也杉の葉と射貫神の前の妙手  
 わらひ天女地利の達し亦未然の  
 吉吉と察する易術の神占十人  
 得る才覚多くまゝ十人従ふ  
 気の勇士十人がこゝろ起つて救  
 十人終小周防大内家の招小應じ

新纂なり

双玉傳

全十五冊

宮田南北著  
歌川國直画



尼子 七國士傳 初集五冊  
為永春水倉  
松亭金水倉

同 第二編 全五冊

松亭金水作  
柳川重信画  
雲州富田の城主天子氏の由来を始  
と一尼子と改むるの縁故を發端と  
す細川政元の僅但にやと諸侯の  
會盟にありき九年の命を佐け  
る二術にありき牛の字を号とし  
る勇士集會を義之を補佐し  
中國に威を震ひ四海に名を李侯  
の美談引つぎ出板に打り弟  
五編全部二十五卷を満尾六

南総里見八犬傳 初輯  
五卷

曲亭馬琴編次  
柳川重信画圖

そのく安房上総の國主と申え  
里見氏の清和源氏の嫡流八幡太  
郎義家朝臣の十二世里見治部少  
輔李其の嫡男義実を以て安房の國  
主の元祖をまき山書のほろ西室町  
將軍義教を鎌倉の持氏朝臣と  
確執をもち後花園天皇の永享十  
三年二月十日持氏父子がはるる報  
國に切腹むるに後持氏の二男三  
男春生安美の公達を結城の氏朝  
すひまじして義勇の人々をかぎひ  
集め里見小栗の豪傑とよりのみ  
結城の城をもちかゝるを永享十一  
年の春より嘉吉元年四月まで籠  
城三年にわび糧も矢種もつたる  
あり城兵もさかなく打死はすも子  
孫の爲に義興の後城を落たる人

小頁盤 四十一







里見八犬傳 二輯 五卷

曲亭主人著 柳川重信画

志の編の巻の義実朝臣の夫人五十  
 子伏姫の自身の上業ト病伏あふ  
 子義実愛申に役の行者の告と  
 加ひ亦其臣堀内藏人貞行の異  
 人の告より東條とち出瀧田未  
 了主從奇異の思ひとひそふ  
 富山のる姫とて伏姫山中にお  
 了法花経と日おとふくあふ  
 犬の為小身とけさる二年の春秋  
 と過一或日神童にあひて因果の  
 道理を感得ありて陰陽の所為を  
 志ととも法花経の功德を玉梓  
 の怨念善果とちり里見の家と  
 さかるじむ八犬出まのあむれ  
 とさじまふの一段かて金瓶大  
 浦がうつ鳥銃也八房の犬命成  
 落伏姫の癒とて倒るる小大

捕後悔して自害ふをさるる  
 捕矢とてその多きあや義実  
 主従さるるて姫君の自殺もふ  
 前後の條下りて古今にた  
 ぬもなき因果因果の道理高  
 僧智識も不及明辨解説何ふ  
 とてさるる親子の秋情を  
 やふ亦賢將と才女の覺語を  
 志して聖もたつ應答志操水  
 晶の珠数分の玉八方にちて八犬  
 志後の世に現を唯の最期且五十  
 子の方の病死大捕發心して、奈  
 とよのりハツの玉のゆゑとち  
 て旅路へあむくさるる巻に  
 いろていふまじ初編の一のすれ  
 結城合戦のみふとて里見と  
 同く龍城とて鎌倉の忠臣  
 大塚匠作の子番作が結城と  
 落てころ君とていふとて  
 志美濃の國樽井の宿とすむに



西公達の内最期の親子言合さ  
 ねどもこころをいひてくまを金運寺  
 とり寺の法場を京軍二百余人さう  
 くの父匠作の討死事をもその子番  
 作の母君の首さうをその母君の昔  
 の夜長嶽とりの所まで落免杖  
 華庵とりの寺に宿り賊僧とら  
 ちをいひさげの妻子束すその名  
 のりわの奇縁これの手束の洞く  
 なまららら君のゆ為小結城の龍城  
 ちる井の丹藏直秀とりの父の娘に  
 てかの犬塚信乃の母おちり手束  
 子束すうけんを滝の川ある弁天へ  
 目録して長禄元年より同お三  
 年の九月まで一日もおとすを夜  
 中に番詰の路の小犬を佐けて伏  
 姫の神灵とちをこれらうのあてと  
 寛正元年七月戌の日小男子産  
 の因縁八天吉の二犬塚信乃とら  
 りのほむ二編目第三の巻二十

七月にいひてくまをくす頭  
 さを番作手束の夫婦の子育の  
 為に男の子と女子のこころをいひ  
 名をも信乃とらるづいりやあて  
 むら番作手束がためて信濃の  
 国夜長嶽の拓華庵小出會する  
 そのゆを忘すことおひまこ信濃の  
 受領のまわ宗後と毒く口さ  
 とりのこふ大塚氏と大塚とせいの  
 落人となりより三年の浪人中世に  
 ちのぶ月夜がかりま大塚の古  
 めの番作のこふ小腹がりの姉あ世  
 とりのの暮六といふのといひはら  
 より聲とら父匠作の結城龍城  
 の功にるも持氏の末子永壽の再  
 六世にるもひ成氏公より恩賞と  
 ちの村長とる敏昌昌とる番作  
 湯治とらて金瘡とあかきと又の  
 諸野にるも居る間ののあてその  
 番作とちのあてくも暮六と憎む



はまの村長は家言を安んず  
て番作はまは其言過を以て  
てまの作は物と思ひて忠臣孝  
子の為に死すひある者官もわ  
目栄枯盛衰のあらひをいかに  
藏の国の名家豊島左門の一族練馬  
平左の家の娘由緒正きも不幸  
にして豊の養子とす濱路とよ  
の美譽をそと貞実なる養母あり  
少くも似せりゆはる智慮のあ  
の母の甥の信乃と濱路の智子と  
て村雨の刀をそとに鎌倉殿へも  
せとするたを其外種々の物さ  
畧をそとに番作自害七死  
信乃の伯母の好善に中なる此は眞  
の家は額藏といふ小者あり此は眞  
伊豆の国北条の莊官大川衛士則任  
といふ者の一子乳名莊之助といふ  
長祿三年十一月朔日に生れり  
二編め五の巻之也終ふ

里見八犬傳

第三輯  
曲亭馬琴編次  
柳川重信圖

この巻のはじめは信乃十二才の  
父よりれより伯母にやまらるる  
物さう額藏心とて信乃の爲  
に豊島暮六が奸を告あたる番  
作の三十五日の法事の後信乃と豊  
六の及引り濱路とよのひや  
の一段且つ信乃の母手束が拾ひ  
と母と高郎太の死骸を埋め八房  
の梅の実に仁義礼智忠信孝悌の  
文字ありふし奇説をれより年五  
て文明九年信乃は十八才濱路は十六才  
とあり豊島氏と管領家の合戦  
ありて文明九年四月十三日臣田植杉千  
葉の人々豊島煉馬の由緒とよのひ  
江古田池袋のらちとよと濱路の  
厚く其の親兄弟の練馬はあつた  
愁ひ歎く心より信乃はあつた心と



告んとすの情合あつて同村多  
 棟助の言理かきて信乃とまら  
 厚く其の死にのぞきて病ひの苦  
 痛を堪へず身の素生をかり入の  
 実子事言といふの成成公の歩後  
 を勤むる人小芝しむ物なるこの女  
 吉といふ小児の長母三幸十月廿四日  
 の國洲崎に生むる実の父も養親  
 の中て長母といふの氏も系圖も立  
 派なるねと伏惟神皇の感得ありと  
 後に大銅見八と名号八木の一妻  
 餘ありて濱路と事見せしる陣代  
 簀土室ハゴトアヌと左衛次郎と  
 つのの意大いかに謀事せし  
 神宮川ゆへ信乃が秘藏す村雨の  
 刃まらぬ悪事信乃はたかば  
 志す村雨成成公にまらぬを言  
 らむ其跡中簀土室濱路と  
 儀をえたる夜毎に信乃は濱路  
 とをたて立退れり本相圖塚山中

左衛次郎村雨の太刀三つは代母と  
 圓珠は無法ある口を必腹を裁か  
 濱路が一念左衛次郎を打て却と  
 とれ為殺せん手その長且の口  
 引き風情者官奉と程愁敷場初  
 編より九編の作者の大功の巻  
 みののく衆之殺せむ既濱路が  
 信乃を苦しむ痛いも左衛次郎は  
 信乃殺すあをす其所寂莫道  
 人といふ火定の穴よりわんを左衛二  
 郎とて濱路と只嫌のありの成成  
 村雨太刀をわらふ長多濱路が腹が  
 どの只大山道郎とて神馬の殘黨  
 天下の豪傑八六市一人の若男とて始  
 其名を奪り此なき額藏の莊助道郎  
 と對ひのまらぬの奇遇又額藏  
 幕六の方立あり村雨上宮六重幕  
 六重幕のあつて即ちいふ  
 かに疑はるる無実の罪あつて  
 さいと牢屋につかまふ怨情と夫塚



信乃村雨の太刀手りからなる  
ふいつるも吉我の御所ふもむ成氏  
公をすまひ処その太刀の傳りあるふ  
よめて疑ひながら敵國のまへに  
あんと既ぬ命あも及ぶとする難  
儀とあり申すも申届けられぬ  
犬丸をえ申す申す申すの捕手と  
切ちし方へ追散す入當りの力量  
早業実ゆゆ故人番作若君さま  
父と傳井の金蓮寺に勇とあふ  
その傳とふわら女姿を育信  
乃の柔和とこれりすか矢市  
初筆にあらぬ程ゆわぬと思  
さる曲亭翁の自然の妙作後者  
官の眼にすり錦繪お摺い  
祭礼の行燈額面はを画き  
吉我の御所の芳流閣といはば信乃  
が血戦さるばる御助の是天見  
八信道と信乃の捕手ふ角上登る  
西個の組打が第三編の大詰あり

里見八犬傳

第四編  
全五卷

曲亭主人編次  
柳川重信画圖

吉我の城中芳流閣の屋上ゆを彼  
犬塚信乃の多くの組子と打破り  
憤然とすその所天銅見八が尊  
来里互に武勇とあふさる組  
さる坂東河の岸にふるさ  
舟の中へ西個の組方伏し落し  
小舟を流しきり方をもた  
成氏の下知りと新織帆太夫といふ  
ゆゑ追手役とせらるる小下給葛  
飾郡行徳小古郡屋文五兵衛と  
ゆゑの釣小舟小舟の流し来ま  
見入るとは里ね人と西個をも氣絶  
あつたあつた見入るも獲生  
甘き信乃のなまも先下り  
支吾兵衛の妻生かるとの見入も  
よまかり今も死をまて敵なる



西三の身も兄弟の義を結ば伏姫神  
其の玉の音も古屋屋文五兵衛の安房  
の神餘の忠臣下 那古三郎の弟ありと  
り因縁其子小文吾の長祿三年土  
月の昔れを流るも以前小見八兄弟  
のほと結わり大塚の権助が見八  
のまご言とよひ節捨ゆるさんと  
甘ぢり足登見兵衛の貴ひと五兵衛  
が方にあぢり乳どり入し縁を  
見す初編二編三編の因縁別貫に  
まご言とよひ節捨ゆるさんと  
小の奇談連綿とよひ縁をくるとまご  
塔橋の小文吾の婿聲房とよひの  
及同の昔身義にふく信乃の身代  
とよひ奇談の作書その間中金屋大  
浦、大坊が念手との修験とよひ番崎  
十郎が子土郎との者観得と号との  
果々大士との内意と見家あり  
兼て行徳と相摸と佳まの一回房八の  
胤の小文吾の婿の安房産る小見後

小大親兵衛とよひ縁の母とよひ  
伏姫の神大八を去るとよひ  
一條まご言の五巻の文明十年正月  
二十日より説いて四冊の中一回十  
二日の夜まご言の時刻の二十日  
夕方より二十日の夜あつて一日二  
夜の物語とよひ同ト所とよひ  
家老とよひまご言の看官道屋  
まご言の五冊とよひ神祇教恋  
無常とよひもむるとよひ誠の古  
今の美談とよひ

里見八犬傳 第五編 全五巻

曲亭主人編次  
柳川重信画  
溪齋英泉画

大塚信乃古郷近くいふ額蔵  
の無未のむきれをまご言とよひ  
とよひ法場にあつて莊助とよひ  
勇烈不軍と切ちし異士とよひ  
片田小の二度の危難とよひ



力二尺八寸の仕太右衛門陣番  
 の兵士を拵き大士をすくひ退か  
 すの快き事六妙義山中の遠目  
 鏡を以て莊助大山道郎の姿を  
 視る多奇遇の冬口説けを  
 どり道郎八村雨の太刀を賣を偽  
 りて定正を知らぬ復仇の強氣巨  
 田助友の速謀により道郎大軍  
 小舟を巻きす小舟を打つ四太士  
 の行合はよく大山の山を思まう  
 ぐはよくさうさうの大戦大士相合  
 と相別と田太地蔵堂道郎莊  
 助首級をわくを暗謀の上野の國  
 井樂郡荒茅山の替村に住音音  
 とのの老女が大山道郎に縁む  
 のののより其新婦曳き道郎の  
 云が貞孝三三の九尺八寸妻を  
 ぬすき讀み毎に因縁の浅  
 くさる奇談古今の事不例しき  
 めは運は勇戦より秋歎の場不

を知る類向莊助道郎三度の出  
 會死する者陽人にも現在の死  
 せりと必なる作意陰鬼陽人を  
 判りしるまの奇妙あ小舟を告る  
 ぬをむす大山道郎が火通の符をま  
 去る家取る業のそ其秘書地  
 此小舟を焼するはさき男方  
 所為合図るね地炕の火火燭を  
 てさる煙さのみりく一方より  
 打捕り大山道郎大川莊助大飼見八  
 大田文喜大塚信乃の去去奇事を  
 一刀の巻をひみす勇猛いさよひ  
 去る七つさの受所陣大鼓再寄  
 路白井の太軍村と押来せ大飼  
 見八か松のままを舟登りその身を  
 色をさる敵の兵を打ちやん  
 とするの勇威老老音三の目失籍  
 平前名姓世田郎の二の天胆も勇  
 気七げさ其力二尺八寸の像具の身  
 甲あけぬと腕鏡不鉢巻をくさる



昔音の長刀をさしつゝ五太吉謙の  
荒茅山を落さんすの忠烈者なり  
五人の勇夫多しふらひむを鬼手  
軍師の美事なすふか小豊塚家  
の早多のりも武家りきりしるも  
うせむして六男三女一同死せしめり  
村長村長を汗ぬる一大事この五の  
巻をうらふいふか次編の多元  
あつてすべし初編よりこ小至く  
巻毎佳境多しと云ふも目ひて此  
五編の作者の為小苦心の場多く  
三全法場をわび名く七額藏を  
救ひしこ右田川の危難道頭を破  
沢山小定正を討つる時  
ひとのゆふより四太吉不慮の  
難戦を五の巻の麓村にて巻中  
軍談の工も場のまゝ筆力の妙  
ふよむ世話人情を尽さんる美に  
曲亭自然の秀作といふべきもの

里見八犬傳

第六輯  
全六冊

曲亭主人編次  
柳川重信画  
溪齋英泉画

上野の国甘楽郡荒井山の麓を  
五大士昇の城兵と再度合戦し  
世四郎音音が必死の働き家火を  
うけて山林草野を焼拂ひ相ふ  
紛まゝと大士乱軍に身をかくし  
奥子單節が行方を追え小次郎  
途中小野猪をもち殺すの強勇  
他を助け宿願求め却て其力を  
あやうくし船虫との毒婦のため  
小次郎はせしれをまゝ石濱の城中に  
奸臣馬加大記のり小憎をうけ  
押しこる月見過すこ亦その  
大記の悪計を冥王の音持によりて  
すぬる舞子の為小次郎の打られ  
難をすくす奇談舞子の乙女お  
りしもの実八犬坂毛野胤智とく



智勇兼備の美少年を多岐の大敵を  
打取の美談小吾毛野の公の  
子業の城を退れ大河を甲冑して  
大行方と巨公大飼見都の役住し  
戦術を教へ其後をく要を云はれ  
旅路小守く下野の国真壁郡細字  
との所を庚申山の怪談をきく  
老一大吉は怪物小を射く怪は  
且山中の大村大角の父一角の者  
の亡妻小逢奇怪の赤岩帯  
山の談古今にめづるさかめ  
殊に今も現前山境の勝地あり  
かそかの山の変化神通をりて一角  
を殺し怪物一角に化し孝子(吾毛)  
をまじり残毒を角太郎の妻雛衣  
が貞即大飼見一角の頼をうけ  
角太郎とわね大由來から大村  
由前大士の一人あるを發明す  
一條大村の玉持は奇談世巻の  
殊に小面自き新赴向の多かり

里見八大傳

第七卷

曲亭主人編次  
柳川重信画

大の巻八大飼現八下野国安核  
郡返壁の白屋中く大村角太郎  
礼度と文武の道で論ト居ふ  
まごの継母船虫との女角太郎  
の離別せし妻雛衣とののど  
つと来りて角太郎の利害を解て  
宅小入吾の奸計とをあらわし  
現八とをばて船虫とをばく  
思ひ角太郎のあふその様子と  
さくんと一角の方へり多く  
の門弟剣法とをあらわす  
打倒して勇威とあらす其後に  
入くまの多くの人々を害せ  
るさんとまをわけてまの  
こまのまを猶ほの夫先とをば  
て角太郎の家にかへりてま



一角船出の角太郎の方ふりつと  
 親の威光を以てあきあきも  
 離衣小自殺を胎内の赤子と  
 とくく茶もみえとす非道の  
 王の飛出て一角をちぢり終小二  
 犬士徳一角の猫と退治する奇談  
 今者毒婦船虫が龍山の逸東本を  
 の者どもを總目と退治するの婦  
 計を天飼現八が信勇を古  
 今傳記ゆゆいなり美談  
 多一第一の巻より第二の巻の  
 里大村の段と説くは第四の  
 巻大塚信乃が諸国をめぐり  
 甲川巨摩郡富野穴山といふ所  
 鉄炮小むらび火より武田の家臣  
 泡盛奈四郎といふものを打ま  
 武勇といふまた同国様石の村長木  
 工作といふの来り奈四郎と信乃  
 とあつてめめめ信乃を伴ひて

その家に住るともく此木工作の  
 家の信乃のゆりあつたをさるる  
 木工作の中より娘濱路といふ  
 里見家の息女五の君といふ  
 いしくをさるる在せりと驚  
 の為にさるる此国の山中に  
 むとまそれより木工作ふや  
 れのいふ縁の因縁ま信乃が  
 りのつげの亡妻濱路の冥あ  
 且て信乃の恋情と告んと五の君  
 の濱路の身をかり奇談ま  
 木工作の妻妻といふ婦人奈四  
 郎と密通してあつた信乃と濱  
 路とありぞけんとする悪まより  
 木工作をさるる信乃を罪ふ  
 たり信乃の罪を無失の罪  
 て武田家へつれられける所  
 井利兵衛亮元といふ眼代役  
 山道郎といふ信乃と庫の内  
 より濱路と連く退くを後へ



誠の亮元来りて家内見分の一條  
 まて武田信昌の明君ありて不回国  
 石和指月院とておぼへ、大和尚信乃  
 道師の對面より仁徳まて善  
 悪の政事ありてありのついで  
 けりて尽してありあり此段の第四  
 のまてより第七の巻の八丁目ゆく  
 説終ふる小犬田小文吾の伊豆の船  
 路小難風ありて鳴々に年とありて  
 中より浪花にありて北陸道に  
 へりて越後の州刈羽郡小千谷の  
 里に旅寮して同国古志郡二十村小  
 鬮牛の神事と見物まての鬮牛越  
 後の国ゆて実名高き一奇事  
 かりて和漢の古事とひね  
 角紙の古実ありてまてとて  
 まてとてたれが例の決り  
 めりて同とて者官の為  
 ゆも益多くも不随の佳境ま  
 てもくぬる

里見八犬傳 第八卷

曲亭主人編次  
 柳川重信画

犬田小文吾が越路中牛合の場小  
 太刀頭をとり彼毒婦船虫の賊  
 所業を一猶偽誓せりて小  
 文吾をさし殺えとあり捕られ土地  
 定めりて古き奥申堂にゆりめ  
 りて大川莊助なるとしてこれ賊  
 ひ賊の隠し家に入りて船虫妻  
 と居る賊の頭酒頭とてありのめ小  
 文吾を返甲する石龜屋次郎とて夜  
 打出すの悪行ありて小文吾莊助の  
 皆殺しふされ亦大田大川の一事り  
 領主に力まて主君人の為小死を  
 なまると老臣の内計にありて命を  
 するも東使二天士の徳首まて  
 旅中大坂毛野ありて小文吾大川  
 小毛野と合せるのめりて大坂軍  
 勇ふりてまてとて大村大



川千住河原の賊ありとてふは  
命ふ及ぶの大逆齒はひるる  
無失の難賢女のなりけり  
のれ千住河原の大穴塚あり  
盗賊の本人を捕無失の罪の證を  
之んとて徳北の郷士永垣義之  
戦をせめて賢士のかもむを  
知るまはるかかひの幸ひゆ水  
垣親子大古の味方とて美談  
大法師麻布のまを穴をえり  
浄め一郷の害を除く奇事湯  
島の社頭小才子葉然らむ  
五子城の機密をけ仇を打を  
す衣表すくく巻大坂毛野か  
ひあより美談多く亦その際に  
いらく飛車司馬浦刑せらる  
悪報毛野とておす大士司馬  
瀧のつと軍議をこぼ密に毛野を  
きんじと六五子の城を打とす  
り毛野仇討の場巻巻かむ

里見八犬傳

第九輯 上帙六卷

曲亭主人編次 二世柳川重信画

この巻文明十五年卯正月の明か  
小大坂毛野脅賀の仇籠山遠東太  
縁連を打とて武藏の国豆川なる  
鈴が森小戦を初て五子子の城兵  
あり小田原の使召の嚴重なる備え  
ありを意を恐る只一入敷を切放  
つて終本意不達なるもの血戦  
もの上もいひ多き危き風情眼前み  
見ふか如珠小大坂口入を東西よ  
り支合母と打とるべき敵の手配り既  
ゆにあり難戦のあり小毛野三仇の  
猶もせむりける二の射大穴西の  
より大甲小文吾東の路より天川莊助  
名のやあひやく打出るさも目ざ  
りし敵討文法筆力自然十方  
不敵當一之段々奪りありさ文  
墨さくみ利劍の徳あること亦



谷山の伏勢仁田直吉を打つたの  
馬をうむの働らき敗軍の注進を  
受けて角谷定正五十子の城より加勢  
の山馬を忠臣河野守之丞を諫して  
後小自害公定正諫をきかす三百  
余を品川小操の犬飼見六村大  
角谷道節の三天を穂北の兵兵  
小伏勢と多のふ切をらと刺す  
大山小塊を射をきかすく敗軍  
多可鯉孝嗣のすくはてをら  
生天塚信方の千余人の勢城以  
て五十子の城を焼打と珠取倉庫  
をひきき金銀米粟をとりて城  
下の村民小施一徳をわらて再度  
五十子を立去の信義をと古河に  
すれば美談をく多し且河  
鯉孝嗣大士と古戦して悪感落  
さすそれの夫士品川をいあぐ舟  
路の退口を一言のいさる多  
古へ軍記の文段をまやるる

多私不似る事どもいさる八犬傳の  
いさる至てはくせ修羅場のつむら  
絶てゝ江湖の軍談師をら是非も  
よそ古戦の助とあすく定正  
の思ふと忠臣を疑ひ国家を保る  
る段を六更に実録のまけるん  
大士穂北の郷土の家城口を結城に  
旅も安房の義実徳居せられて  
義成里見の二位とわらぐみその  
段の過ゆゆもいさるくはくそ  
看官のあふ毎多く長編ゆくと  
よもわらまらわらえらひのわらはせ  
をの辨しめし事すれり或  
上総の国夷灣郡館山の城主を  
幕田権頭素藤といふ者の素生  
まこそ者といふく鬼語をきかす  
一城の主とあり奇談を八百七  
尾とのわらき尾の出まを素藤  
の悪感なき里見家の姫君妻  
みるさる一條よりをわらぐ







精を通し津梁をほそる後妙  
 椿の奇術濱路姫をあるは義成  
 を迷う大江を遠く素藤館を  
 夜打と里見勢を追出一再城主  
 とす妙椿と小果とを極め里見  
 勢をも責め敗軍なりあ中次  
 妙椿とさるの所為をい濱路姫  
 を盗出途中伏姫の神具に  
 奇のされ且胸を踏られてより邪術  
 をまゝ義成後悔して大江をめ  
 必えとする一條親兵衛の武藏の国  
 あり上野の原の茶店より河鯉  
 佐太郎忠孝のより大坂毛野が  
 鈴の森の仇討あり大寺の僧坊ま  
 かり河鯉氏の無失の罪をまじり  
 孤化と腹の刀自より河鯉を救ふ  
 の妙術大江河鯉をさるえとてをかり  
 する途中小戦あり互の秘術あり  
 ありこの九輯中伏巻の尾あり  
 この巻毎新奇妙談をいふ

里見八犬傳

第九輯 下巻上五冊

曲亭主人編次 柳川重信画

大江親兵衛河鯉佐太郎戦を止めて  
 二人の名号合再度茶店ありより  
 あり互に身の上をなると茶店の  
 姥が面影腹の刀目の白に似ると  
 姥は河鯉の母の命を救れ  
 らる孤をその後に乳母と化して佐  
 太郎を平まひ寺談政本和といふ  
 名より神通力と安房のこと言  
 する大江小をゆるりながら頼政  
 木の老松に不忍の池を龍と化し  
 昇天するの神童高国河原は江河  
 鯉賣茶を視て大士に因みあつた  
 團太小名号あり奇遇里小の乱坊  
 をうちこして味方をゆるりあ  
 河鯉氏名を改めて政本大全と  
 あり後半里見家の名臣といふ  
 事後功をいふ平賀崎土郎に會て



上総小渡海一再度館山の城を  
 勇らちちりまきく素藤を生  
 捕て妙椿裡を亡びたそをく  
 この妙椿とらふ妖女僧のつじ八  
 房の犬小乳をわす青う現  
 こつらつとも大い善壇をいふ念  
 をちし種ハ玉梓の餘怨を消そ  
 里見に崇り一因果初編のちり  
 小過しうこふひひて白き紙り  
 さぞ誠けあきこの城作らあ  
 さそ善成の仁政館山の民を賑  
 素藤を誅して功臣をその突  
 江大功を他人ふあつて結城に  
 智むくかの地にかつて大和  
 七武士らり小里見季基の尊  
 をそめ古戦忠の美をまら  
 その法場小災ひの一本事  
 来ひて七武士の危難いふ嘉  
 吉のむしと思ひ出せ結城法  
 さそ小修羅の備えか巻尾あり

里見八犬傳

第九輯 下帙中五冊

曲亭主人編次 柳川重信画

此巻の義烈院殿里見季基の追善  
 結城の古戦場、大庵の法事と後  
 逸一匹寺の住持徳用との悪僧  
 同相りあつて結城の家臣長城  
 枕之助、惲利堅名、泉司、経稜、根生  
 野、飛雁、太素、頼るるる者とか  
 らひまゝ徳用の弟子ある堅削多と  
 凡そ三百五十四人三ふそつて法  
 場とせめんとはとのまきまそ大六  
 とそつて二ヶ所小日道節大角  
 毛野の、大庵小残り、莊助、小文吾  
 現ハハ林の中に伏し信乃の、蟻崎氏  
 と、大法師と守護して立退六犬六  
 敵を生捕て退りしとつて信乃ハ  
 途中小大敵とつてあひ左右川の辺  
 ゆて徳用とたふ最中、大法師と  
 蟻崎氏の強勇の惲利が、大車にこ



まれ既小老をさすの所(大江親兵衛仁)が来かすを忽ち大敵をきり  
 せざるされどもこの時仁が同行し  
 政本高嗣石電屋次團大助三の三  
 人と伏勢の鉄炮をせりしれり  
 八犬士にふれりて相揃ひ、大と蚤  
 崎氏とを介抱して六道山能化院教主  
 おとのの荒寺に休息しは城の連  
 とまつ所(城内の使者小山大夫の次郎  
 朝重)といふのききりと諸大士の無礼  
 をこめて無事とせりしれり  
 嘉吉元年七月廿日曾小地蔵尊を建  
 立して里見季基の菩提吊らひし  
 淨西坊俗性十十八といふの忠義を  
 采西法師の孝にあらひ伏姫の天神  
 風とせりて難とせり將軍地蔵の  
 冥加あて大士の難に救度もよこし  
 ころ神通力六道山に結城七郎朝光の  
 建立せしむるも七の重とせり  
 因縁奇談巻とふるも入らむ

前後の分解其の場を眼  
 前小着るていふる及や、何の如文  
 とせりし長編の奇作を賞し  
 色一とて大士とせり情願とせり  
 かの安房の国(うら)稲村瀧田両城  
 けり里見両君(目見と君臣上下  
 数十年の本意をせりしれり  
 美談多くとせり畧してゆい  
 させそれより大士の本生と金鞠氏  
 小るさんとて、大法師と評議あり  
 ころ中その長に定むれ京都將軍  
 義尚公(使にあらはるの一條その前  
 白濱の無量山延命と小本  
 基の送指といふまじり法  
 妙直(受手一節が大江親兵衛と  
 の再會)と七全申新古のまじり  
 對面とあらはるる多くとせり  
 て親兵衛(都のむら)の大役といひ  
 つひに長等(照文と船路といふ  
 三の國)子(寄といふ)漢(風)待と



海賊の難ふりてあり大支船商人  
 とて立る海童王修羅五郎といふ  
 海賊の頭と水中の難戦妓雪代  
 四郎の水練によつてあやう合つた  
 是照文の陸におきて海賊の首領  
 今純友查勘太といふありと天  
 一既小必死とありしころ一三の  
 のく小奥郡の城主隣尾判官伊  
 近の賊と制表する軍兵の加勢小  
 あり功をたててをさう都への不  
 却て管領政元へ送る將軍に金  
 銀をたてすあり且金碗姓のこを  
 天子に奉る聞し首尾よく安房へ  
 かくんせしころ小細川政元  
 大江をたててをさし許さば長  
 在元豊漢志ま命千里独行  
 虚五関といふ句にありて巻を  
 をむらわく次編を

よもろあへ

時代物の部

小野小町一代記 全六冊

安倍仲磨輪廻物語 全五冊

大まの安倍仲磨入唐しその奇談あり

繪本菅原實記 前十一冊 後

繪本玉藻談 全五冊

玉藻先生の画作ありと三國の人物をくその趣を尽されり

繪本三國妖婦傳 三編揃十五冊

前書に同やうなれども玉藻煎るは  
 いろてこの物ごをせりといふべし



奇談怪談の部

英草紙 全五冊

般系々夜話 全五冊

秀句冊 全五冊

御伽ばうた 全十冊

こまの奇談怪談の種本をも  
いへるものごとく古今の珍説を  
多くあつめり

遠山奇談 全八冊

小夜あじ 全五冊

奇談怪談の実況を編輯し  
低く古今にわき書といへり

鬼月物語 全五冊

一二草 全五冊

風草紙 全五冊

其の類の物ごう八数百部あり  
て多く記はくさるるはごうか  
其中の佳作をえりて出せり

著作堂一席話 近刻

曲草馬琴翁七十余歳の長壽  
まで五十年未見聞せし奇談  
珍説を古今未だの高論免  
と成りあつる唯一席の物語り  
といふものと面白くはるるを  
の草紙ゆめ似るる新奇談多し

いふまでも新編のさるる名  
著作堂の拍掌あつる一席話  
を待身あつるがらん



北越奇談 全六冊

越後雪譜 全六冊

大の書ハ北越冬春のあつ雪申  
の奇観多ク工致あつ居る  
又山名所を視る識にありあき  
珍書多し

山東翁栢樹著

繪入 田家茶話 全本五卷  
讀本 大藏永常集

そのく此書ハ忠臣孝子義夫節婦  
の身の上を初之古今の奇談を  
數百ヶ條あつありあき  
物さうふわがごとく只命ハ小異見  
がすく眠気と催さるるはむべ  
ま文章とてよく心く飢えて考  
甘讀と存るは實小田家の俚  
言小言く聞き死を第一と  
子ども流小言よく分解ハ西の具

ほろろとどろどろと流れてきせぬ  
その所ハかりあつぬめやかのづら  
縁取すめてそまらうくと流れて  
おゆのま紙とてふまらうとのハ  
まらうとて戯作のめがらふわさ  
とどろどろと流るる其中心は教訓と  
つとてまらうとて殊に近年の  
見聞せしむるまらうとて平  
とどろどろと流るる席をよほぬ  
とどろどろと流るる聴取ふとて  
らまらうとて茶のまらうの上  
わらわら軍治のまらうとて  
方々のまらうとてそのまら  
賊とあつまらうとて一因  
奇代の実録とあり



観言集百問怪談 全五

けまの国多事怪風く  
怪言いろく形や海い  
とありり

膝栗毛 全部 六冊  
十返舎九

高路詣 九冊  
式亭三馬

高僧傳の類

釋尊御一代圖會

北齋老人為一画図

聖徳太子傳圖會 六冊

日蓮御一生記圖會 前後  
十二卷

大徳高祖上人の御系圖  
御一代の事跡を諸書にのりて  
改正一御行状を國會よりわら  
ていり一の御遺難を目前の拜  
ねがごとく古圖をうり丹誠加  
りさまの宗祖の御傳世に多し  
と云ふあり不化くもは依く  
御宗言の人々我慢の扁屈をい  
こころく信心のまこと成りて拜  
覽むるべきあり

喜多川實雪画圖



繪本一休譚 前二卷後

中將姫一代記 全五冊

熊谷蓮生一代記 全七冊

弘法大師御傳記 全五冊

圓光大師御傳記 全六冊

釋迦八相記 全五冊

日蓮上人御傳記 全五冊

親鸞上人繪詞傳 全三冊

西行法師一代記 全六冊

北四輩順拜圖繪 全十冊

諸大人隨筆之部

今昔物語 宇治納言源隆國郷著

宇治拾遺物語

古今著聞集 全二十卷

集義和書 熊沢海著

集義外書 同著

駿臺雜話 鳩巢先生著 全五卷

西行撰集抄 全六卷

開田耕筆 全五卷

開田次筆 全五卷







思齋漫録

十前後卷

梅園雜話 二合冊

尚古むさみ 全二冊

伊豆日記

七嶋日記

開窓筆記 全二冊

俳家奇人譚 六前後冊

萍花漫録 全

擁書漫筆 全四卷  
高田友清著

松の屋大人の隨筆とその風高く  
多俗より速き書ぶるるれども  
よりくこをよむ附のすく一際  
かりろくおぼろしく初学の道なる  
ゆるの書とりのり

棟梁集 同著 全二冊

相馬日記 同著 全四冊

富士根元記 同著 全二冊

萍の何々 全二冊

と近江より東に旅寐せ博學  
の阿蘭梨が著く隨筆ゆる  
その文をさすくつかのげく風  
調高きかりのき新隨筆の  
るふく第一から

梧桐漫筆 前後四卷  
太田錦城先生著



梧波教諭 前四卷 後

むぎこじ 瀬川如阜作 全二冊

花街漫録 全二冊

雑交記 馬琴著 全二冊

狂歌奇人譚 全六冊

廣益俗説辨 全七五冊

還魂紙料 全二冊 柳亭種彦著

玄同放言 前後六卷 第三編出来 曲亭大人著編

の先哲も解さる書籍の注釈を  
丹誠有益のものを多くし此書成  
印々諸君のいひく著作堂の号  
を以て翁の博文強記を以て

近代世事談 全五冊

俳林沾涼著

の書東山殿よりこの呉服食  
菜草木景財近代舶来の主層其  
外書画詩哥連俳遊藝雜伎ふ  
りさすや何いらの以り初ま  
とひりて紙をく奉る六机夜  
をそ殊更に珍重の書かたへ

同二編 三編 各五冊 近刻

太平樂皇國性質 全二冊

水亭亭金水著

の書儒者と佛者の説の異なる  
をそを説きゆりて古今風俗の  
變化の神妙を興口をひら



誤るのとりふ説或は山  
 鯨を三味線琴の説豪富  
 貧士を侮る説夫婦喧嘩や田  
 女あつひの刺墨江戸の方言を  
 外傳を多くし何れも  
 雅俗のりれ説をつけし珍書  
 をそとくし書を用ひて教訓と  
 ありしもの多かりしを求めて  
 視るべし

唐軍並諸記録

周武王軍談 全五卷

縮文畧解画鈔

殷の紂王位にのりてより悪行  
 をまじし姫小みさ酒ふおれ姐  
 とのふ美人を寵愛して忠臣を殺  
 聖人ともやまてこふしく武王太  
 公望とて小謀つて天下のふ小紂  
 王を征し終に殷の天子を代はり  
 年とて六百余年に及び武王國  
 をたし周の代となり百年の基を  
 印しくそれより廿五代の周の景王  
 まの王はあつた

漢楚軍談 全十卷

曲亭馬琴略文

周の代亡びて秦の始皇即位の後阿  
 房宮といふ廣大の玉殿を建三千



人の美女と日夜媼酒不みぎて悪  
人趙高と愛しかまをゆめ後  
儒者と穴不らばめ書物を焼す  
その外種々の悪行はつり沙丘と云  
と云ふ小崩之二世皇帝位子即て  
天下大はたき六國の子孫おひく不  
旗をあげ國を起さんとて中も劉  
邦といふ人芒碭山の白蛇を切て衆  
人を従之張良といふ軍法の奇師  
と味方とてより項羽と天下を争  
つて終つて項羽と亡て漢家四百  
余年の基をむりて高祖皇帝  
帝といふ漢楚二十余年の争  
戦をせいとるかくとるあるを馬  
子の筆意を略文あつてことく  
くその本もどうとらざる古今  
奇代の繪入の小傳貸入を借  
もせり諸國の人乃家ごとふ  
まことふとらうと云ふ

葛飾戴斗画  
次編浪舟出来

繪 通俗三國志 一編  
本 十冊

漢の高祖より二百年に王莽と  
いふ者國家を奪ひ一旦漢の世は  
失ふといふまでを漢といふその比  
例秀といふ人出て漢の世を再興し  
て光武皇帝と稱し亦二百年の基  
行を起せりといふ漢といふは此  
後漢の十二代靈帝のとき小室つそ  
政事乱れと黄巾の賊かたて都を  
責んとてその頃都を焼く董卓と  
いふ者天子の内宦十常侍の悪人  
と殺して天下の權威をとりて天  
子殺るがうゆめ大臣王允これ  
をよめき貂蟬といふ美人をよめ  
董卓を殺し世を治めんとすその  
其後董卓を權郭汜再び王允を  
打ち長安を乱まるとは曹操とい  
ふ人も大軍をたてて長安を救ひ

外題 繪 通俗三國志







繪本西遊記

初編十卷  
二編同  
三編同  
四編同

全本四十卷の内満尾

意馬心猿のほとけより説き出さる  
奇代の母作三藏法師孫行者より  
神猿と下め外小戒沙神の後弟  
を拜する西天へ経文をとりあはせる  
山川万里の艰难辛苦異類異形の  
妖魔を退治し孫悟空の神通力に  
由及ぶる人物は三藏法師を  
苦める節も孫行者の神  
通金斗雲といふ雲にのりて東  
海をいりて觀世音菩薩を西覓  
をたふり種々の奇談珍説多く  
数千里の山海を経て終つて西に  
いりて本意とどろのあむれ人  
世一代の用心とをわける  
教訓あり

水滸画傳

初編  
二編十卷

曲亭馬琴譯  
葛飾北齋画

その水滸傳の小説中第一の料  
かるそのいそをゆゑに妙作あり  
を成す馬琴先生の筆削せられ  
て水滸傳注解和歌の中は  
この画本を第一とすべし

水滸画傳

三編五冊

高井蘭山補  
北齋為一画

四編 五冊  
五編 五冊  
六編 五冊  
七編 五冊

妙しく次刻して百回とす  
全本とあはれず看官も精  
覽ありて數元小冊識の功と遠  
きものとす



繪 國性爺忠義傳 前後二十三卷

豊臣太閤朝鮮と征伐ありて  
 大明國より魏祖といふ夷の國と  
 戦ひ北の方危く難決りしが其  
 後和朝の軍兵はわびて三年過か  
 大明の亂を萬曆帝酒色不溺  
 政事とて一まの宗禎帝位と  
 於て李自成といふ者陝西の北平  
 河東の地を亂る殊に  
 宋孩子といふ軍士謀を以て  
 明軍を破り賊兵をびらき  
 米を乞ふ諸國の飢を乞ふ人  
 威をふるひ大軍を以て都を  
 登り竟ふ天を亡くして李自成  
 且國王とて大明といふ國に  
 二百十一年やて亡びりまれども

呉三桂といふ忠臣の大名魏祖の  
 軍勢をかりて李國玉の賊兵を  
 破り國の仇をひらきし時魏祖の  
 大將明國の弊不棄して明の都  
 とうをひらきしを魏祖の子孫  
 弘光帝とて鄭芝龍といふ者と  
 大將といひ清軍魏祖を破りて  
 期の定まりありしとて大明の代絶  
 明帝始終今こうを隆武  
 帝位とて魏祖の孫四首余州の十  
 分を保ちしとて鄭芝龍の子  
 子鄭森といふの日本長崎小生  
 といふありしとて父の鄭芝龍日本國へ  
 福をひてかの國へいせ清軍を破  
 るの大將とて李自成の女神國  
 の血脉とて勇猛武略敵するもの  
 たりしとて清の大軍を破りて  
 明の國風元小治一國を治めんと  
 するありしとて帝位を治めんと



ありて再度乱れしをみるに  
 是の鄭森は国民の父なりといふ  
 稱早をふり国性命と稱はるの  
 のち永曆帝とあり立く亞羅漢の  
 よふ豪傑とあり南洋鳴らせり  
 安海城とあり泉のてふ  
 大功をふるるといふ明国の運気  
 はきたつ万事ありふせむ大  
 寛との地不捕りて病死せよ  
 う道も清軍その地を責むと  
 うるも国性命より三代目ありて  
 しく和睦ありて忠義のなま  
 代不ぬやうなるあり日本国へ加  
 勢をよむまゝ和軍を徳清兵と  
 稱せしめたるありとありとあり  
 唐土にありて朝鮮に伐つ困窮  
 して和朝と稱せし日本とての国性  
 命とありてあり  
 美談抄

琉球軍記 全十卷

清俗奇聞 全六卷

大明国亡びてのち當時の清朝の  
 風俗とありてあり書けり

唐土名勝圖會 全六卷

漢朝へてありしもの描きけり彼  
 地のとを眼前にえりてあり

通俗俳聞録 前後十二卷

六樹園大入譯  
 唐土の公事明新奇談とありて  
 識に珍説とあり書あり







寛政年中より天保のころまで江戸  
戯作者画工の名目その大略とある

作者 山東菴京傳

、 式亭三馬

、 立川馬馬

、 振鷺亭主人

、 咸和亭鬼武

、 十返舎一九

、 小枝 繁

右よりく故人とある

作者 曲亭馬琴

、 爲永春水

、 松亭金水

、 墨川亭雪麿

、 瀧亭鯉丈

、 花笠文京

、 文亭綾繼

、 山東京山

、 柳亭種彦

右当時よりく流行の先生あり

この外二代目の人々もこの風のもの  
大人もその名目その後編外記の  
の末にそのくあり

浮世画師 歌川豊春

、 歌川豊國

、 歌川豊廣

、 歌川國安

、 歌川國丸

、 歌川豊清

、 柳川重信

右のつぎは名人の画先生の  
惜其故人とある

浮世画師 葛飾為一老人

、 歌川國貞

、 蹄齋北馬

、 二世 柳川重信

、 歌川國若

、 歌川國直

、 漢齋英泉

右の當時よりく流行の名人







